

伝道者の書 第9章 2～3節前半・11節

2～3節前半

「すべての事はすべての人に同じように起こる。同じ結末が、正しい人にも、悪者にも、善人にも、きよい人にも、汚れた人にも、いけにえをささげる人にも、いけにえをささげない人にも来る。善人にも、罪人にも同様である。誓う者にも、誓うのを恐れる者にも同様である。同じ結末がすべての人に来るということ、これは日の下で行われるすべての事のうちで最も悪い。」

キリスト者作家である三浦綾子は、その小説の中で、父親と養女に以下のような会話をさせている。

父親が養女に対して、人間に平等に与えられているものは何かと問う。彼女は太陽の光と答えるが、太陽の光が届かないところで生きている人間もいると父親は答える。

すると彼女は1日である24時間と答え、父親はなるほどと相槌を打つものの、父親が彼女に教えようとした人間に平等に与えられているものとは「死」であった。

冒頭の伝道者の書はそれを示している。つまり「死」は因果応報ではなく全ての人間に与えられているものである。

因果応報。

この言葉を聞くとときに、自らに内在する矛盾を鋭く突かれる。自分以外の人は何らかの過ちを犯した時には裁きを期待しながら自分が過ちを犯した時には赦しを乞う姿だ。明らかに矛盾だ。人に因果応報を求めるのであれば自分にもそうあらねばならないのだ。しかし人間はそうではない。この矛盾を抱えているのが人間の姿である。しかし11節ではこうも語られている。

「私は再び、日の下を見たが、競争は足の早い人のものではなく、戦いは勇士のものではなく、またパンは知恵のある人のものではなく、また富は悟りのある人のものではなく、愛顧は知識のある人のものではないことがわかった。すべての人が時と機会に出会うからだ。」

これは、全ての人に全てのことの機会が与えられているということに他ならない。

自己矛盾を抱えた人間をまるごと受け容れて下さり、それをはっきりと赦すと、十字架の上で宣言したキリストの言葉。それを聞く機会は全ての人に与えられているのだ。そしてこの宣言をした方によって新たに生きる機会もまた全ての人に与えられているのだ。

聞こう。赦しの言葉を。

生きよう。赦しの言葉と共に。